

## マイノングの価値論と感情の正当性の問題

——フッサール価値論の把握説解釈との比較を通じて——

小関 健太郎

(東京大学・日本学術振興会特別研究員 PD)

### はじめに

親切な友人や美しい空、つまらない映画や悲惨な戦争のように、日常的な経験において、経験の対象はしばしば何らかの肯定的な価値や否定的な価値を伴ったものとして私たちに現れる。しかしながら、そもそも価値とは何であり、そして私たちが価値を感じたり価値を判断したりするということは何のようなことなのだろうか。このような問いは価値論の領域に属する問題である。

マイノングは研究のキャリアを通じて価値論の領域における諸問題に取り組んでおり、自らの哲学の要約を含む晩年の自伝的小論 (Meinong 1921) においても、主要な仕事のひとつとして対象論や心理学などと並べて「価値論および倫理学」の項目を立てている (倫理学は価値論の一領域として位置づけられている)。マイノングの価値論の出発点となったのは、ブレンターノ流の情動の志向性理論を基盤としながら、当時台頭しつつあった経済学的な価値の理論を価値一般の理論、すなわち一般価値論 (*allgemeine Werttheorie*) へと一般化することを試みることであり、少なくとも歴史的な意義の点で言えば、独逸哲学の価値論の伝統における代表的な成果の一つに数えることができる<sup>1</sup>。

---

1. ただし、マイノングがしばしば著作において他の研究に言及し、時にはそうした研究からも成果を取り入れているように、マイノングの価値論はマイノングの単独的な成果ではなく、エーレンフェルス (Christian von Ehrenfels) やヴィタゼク (Stephan Witasek) をはじめとする自身の指導学生や同時代の哲学者との協働や論争を通じて形成されたものでもある。また、現象学的な文脈では、例えばシェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値論理学』の

翻って現代哲学においては、マイノングの形而上学（対象論）がラッセルによる批判以来のある種の「悪名」を経つつも再評価へと至ったのに対して、マイノングの価値論の研究は（皆無ではないものの）いまだマイナーな状況に留まっている。しかしながら、いわゆる「死の害」の問題をめぐる現代の論争においてマイノング主義的な形而上学を援用する試みも見られるように（Yourgrau 1987）、形而上学と価値論という二つのトピックは無縁ではない<sup>2</sup>。そして、このことはマイノング自身の価値論においても同様である。もちろん、マイノングの哲学の優れた概説（Findlay 1963）において著者のフィンドリーがそのいくつかを指摘しているように、マイノングの価値論には批判の余地もある。しかしながら、フィンドリー自身もその重要性を認めており、私も同意するように、マイノングの価値論は少なくない点で価値の問題に独自の仕方でも光を当てるものである（cf. Findlay 1963, pp. 288f.）。

マイノングの価値論はその発展上、主観主義的な前期価値論と、客観的かつ絶対的な価値を認める後期価値論に分けることができる。マイノングはまた、私たちが価値を把握するのは喜びや怒りのような感情に基づく情動的経験を通じてであるという立場を擁護したことで知られており、この立場は前期と後期を通じて一貫している<sup>3</sup>。このような立場はいくつかの仕方と呼ばれているが、以下では八重樫（2017）に従って（価値に関する、あるいは価値と感情の関係についての）「把握説」と呼ぶことにする。

本稿の目的は、マイノングの後期価値論を、特に前期価値論からの価値と感情の関係の変化に着目しつつ再構成することである。その上で本稿では、価値に関する把握説という共通項を手がかりとして、価値に関わる感情の正当性の問題に関してフッサールの価値論との比較を与える。フッサールはマイノングと同様に、ブレンターノの影響を受けつつも独自の価値論を展開したことで知られているが、八重樫はフッサールの価値論における価値の把握（価値覚 [Wertnehmung]）について（マイノングの立場と同様の）把握説的な解釈を擁護している（八重樫 2017, p. 171）。本稿ではまず、マイノングの後期価値論を代表する 1917 年の『情動的現前化について』（Über

---

第 2 版序文にもマイノングの価値論への言及が見いだされる（Scheler 1966, p. 13; cf. 小倉 1972, p. 20）。

2. 現代のマイノング主義においても、例えばマイノングの形而上学と価値論を環境倫理の基礎づけへと展開するラウトリー（シルヴァン）のプロジェクトを挙げることができる（Sylvan 1986）。

3. この立場は、感情は別の仕方でも把握された価値に対する反応であるとする反応説と対比されている（八重樫 2017, pp. 159ff.）。

*emotionale Präsentation*; 以下 EP) を主に参照する形で、マイノングの価値論を、特にその二つの価値概念を中心に再構成する (1-3 節)。その上で、フッサール価値論の把握説的な解釈をマイノングの価値論と比較することを通じて、特に感情の正当性の相対性に関する両者の説明の差異を明確化する (4 節)。最後に、マイノングの価値論における基づけられた対象としての価値という観点から、価値の絶対性と相対性の両立可能性についてさらに検討を加える (5 節)。

## 1. マイノングの志向性理論と情動的現前化

マイノングの価値論を理解するための手がかりとして、はじめにマイノングの志向性理論に目を向けることは有用である。マイノングは志向的経験 (体験) を、経験の対象 (Gegenstand)、内容 (Inhalt)、作用 (Akt) の三要素の観点から説明する。まず、対象と内容の関係に目を向けよう。志向的経験は常に何らかの対象についてのものであるが、経験がある対象についてのものであるためには、経験主体の心的な状態のうち、その対象を特定可能な何らかの要素が含まれていなければならない。別の言い方では、経験がある対象についての経験であるとき、経験主体の心的な状態は、当の対象を特定するのに十分な情報を含んでいる、ということもできるだろう。このような要素が経験の内容である。内容が対象を特定する機能を持つことを、マイノングは内容による対象の現前化 (Präsentation) と呼ぶ。現前化は、それが意識の能動的な働きに先立つという点で、経験の受動的な次元を構成する。

これに対して、経験の要素のうち、経験の様式を規定するものが経験の作用と呼ばれる。つまり、志向的経験は経験の内容を通じて対象に関わるという図式に置かれているが、経験はそれが対象に「どのように」関わるかに応じて表象や判断といった種類に分類され、作用はこのような経験の種類の規定の役割を果たしている要素である。

マイノングによれば、経験の種類には受動的なものと能動的なものがある。具体的には、表象と感情は受動的な経験であり、判断や想定、欲求は能動的な経験である。特に、私たちは対象の存在や性質についての判断や想定によってはじめて、現前化された対象を把握する (erfassen) のであり、このことは (判断や想定による) 対象の思念 (Meinen) と呼ばれる。

マイノングはまた、経験を理性的なものと情動的なものに分類した上で、対象の現前化が理性的な経験だけでなく情動的な経験においても可能であるという見解を擁

護する。判断や想定といった、理性的な経験における対象の現前化（理性的現前化 [intellektuelle Präsentation]）に対して、感情 (Gefühl) や欲求 (Begehrung) における対象の現前化は情動的現前化 (emotionale Präsentation) と呼ばれる<sup>4</sup>。

情動的経験のうち感情経験に関して、マイノングは感情を 4 つのクラスに分類している。つまり、対象の善い/悪い (gut/übel) に関わる価値感情 (Wertgefühl)、快い/不快である (angenehm/unangenehm) に関わる感性的 (sinnliches →) ないし快楽的感情 (hedonisches Gefühl)、美しい/醜い (schön/häßlich) に関わる美的感情 (ästhetisches Gefühl)、真 (真理) である/偽である (wahr/falsch) に関わる論理的感情 (logisches Gefühl) である (EP, §10; cf. Chrudzimski 2007, pp. 234f.)<sup>5</sup>。やや紛らわしい点であるが、マイノングの用語法では、これらのうち善さや悪さが狭義の価値と言われ、上記のすべての性質は広義の価値と言われる (cf. EP, pp. 461f.)。したがって、価値感情以外の感情もどれも広義の価値に関わる。(以下では基本的に、価値ということで広義の価値を意味することにする。)

## 2. 感情と価値 I: 個人的価値

では、感情と (広義の) 価値は具体的にどのように関わっているのだろうか。マイ

---

4. マイノングは、経験は経験の外部の対象を現前化する (異他現前化 [Fremdpräsentation]) 以外に、経験それ自身を現前化することもできる (自己現前化 [Selbstpräsentation]) という見解を擁護している。つまり、私たちは経験 (経験の内容や作用) をいわば手がかりとして、他の経験を介在させることなしに、当の経験それ自体を対象として特定することができる。マイノングは例として痛みの経験を挙げている (EP, p. 293)。このような自己現前化においては価値が現前化されるわけではないので、厳密に言えば、価値を現前化するのは前者の、感情経験による異他現前化である。

5. ただし、4 つのクラスだけで感情の種類を (ひいては対応する価値の種類を) 尽くすことができるのかどうかについては批判もある (cf. Simons 2017, p. 450)。一方で、このことはマイノングがさまざまな具体的な価値について考慮していないということを意味するわけではない。例えば、マイノングは価値と感情の関係の導入の中では「気持ちのよい風呂、新鮮な空気、ひどい暑さ、気にさわる騒音、美しい色彩、楽しい話や悲しい話、退屈な話や面白い話、崇高な芸術作品、価値ある人々、善い決意」([von] angenehmem Bade, frischer Luft, drückender Hitze, lästigem Geräusch, schöner Farbe, lustiger oder trauriger, langweiliger oder unterhaltender Geschichte, erhabenem Kunstwerk, wertvollen Menschen, guten Vorsätzen; EP, p. 316) といった例も挙げている。マイノングの分類から (その妥当性は別として) 帰結するのは、あくまでこれらの例も感情の 4 つのクラスのいずれかに分類できるということである。

ノングによれば、対象は二つの仕方で感情経験に関わり、それぞれにある種の価値と呼べるものが寄与している。

まず、対象は経験主体（評価主体）に感情を喚起する傾向的な性質（後述するように、能力あるいは力能 [Eignung, Fähigkeit] とも表現される）を、その評価主体に相対的に持つ。マイノングは対象のこの性質を対象の「個人的価値」(persönlicher Wert) と呼ぶ (EP, p. 440; PPW, pp. 270f.)。個人的価値がどのようなものか理解するために、例として、ある料理がある人にとってはおいしく感じられ、同じ料理が別の人にはまずく感じられるという場合を考えてみよう（これらの感情は感性的感情の例に数えられるだろう）。このような状況は容易に想像できるが、個人的価値の観点からは次のように説明される。つまり、このことは当の料理が前者に肯定的な感性的感情を喚起するという性質（個人的価値）を持ち、他方で同時に後者に否定的な感性的感情を喚起するという性質（個人的価値）を持つということを意味する。個人的価値は評価主体に対して相対的であるという点で、主観主義的かつ相対主義的な価値概念である。

実際のところ、1912年の論文「一般価値論における心理学の擁護と心理主義の批判」(PPW) でマイノング自身によっても整理されているように、価値についてのこのような主観主義的な見解は、対象論の立場に至る以前の、マイノングの前期価値論の主要著作である 1894年の『価値論の心理学-倫理学的研究』においてすでにほぼ同様の形で原型が見られる。ここで注意される必要があるのは、価値が主観相対的なものであるということは、価値が心的なものであるということを含意するわけではないということである。個人的価値はむしろ、前期価値論と後期価値論を通じて対象の傾向性という実在論的な要素に関わっている (cf. Marek 2024, §7.1; Reicher 2009, pp. 115f.)。特に後期価値論においては、個人的価値は「対象がそれに価値客体としての(実践的な) 関心を喚起する力能」(“die Fähigkeit eines Gegenstandes [...], das (praktische) Interesse eines Wertobjektes auf sich zu ziehen”) として定義できるだろうという仕方で述べられている (EP, p. 426)。

### 3. 感情と価値 II: 非個人的価値とその形而上学

マイノングの前期価値論における価値概念は、評価主体に感情を喚起する性質としての主観相対的な価値を意味していた。しかしながらその後マイノングは、1節で取り上げた現前化の概念の精緻化を経て、感情を喚起する性質としての価値とは別

に、喚起された感情において現前化される固有の対象に注目するようになり、これをマイノングは「非個人的価値」(unpersönlicher Wert) と呼ぶ (EP, p. 440)。

感情経験において非個人的価値が現前化されるということはどのような事態なのだろうか。マイノングによればまず、感情経験はそれ単独で自足的な経験ではなく、それ以外の経験による対象の把握を「心理学的前提」(psychologische Voraussetzung) として要求する (EP, §8)。例えば青い空を見てこの空は美しいと感じるとき、そのためにはそれに (少なくとも概念的に) 先立って、空そのものや、空が青いということが (表象や判断、想定によって) 現前化されている必要がある。そして感情経験それ自体において現前化されているのは、空やその青さという対象に基づけられた「美しさ」という価値そのものである、ということがマイノングの主張である。

マイノングはこのような、感情によって現前化される対象を (前述の狭義の価値との区別も念頭に) 「品価的なもの」(Dignitativ) と名づけている (EP, p. 397)。品価的なものが、当の価値が帰される対象やその性質に基づけられた (fundiert) 対象 (高階の対象) であるということは、マイノングの見解の重要なポイントである (EP, pp. 394–397; cf. EP, pp. 391f.)。品価的なものは対象の非価値的または (別の) 非価値的な性質に依存しているが、それに還元されるわけではない<sup>6</sup>。また、基づけ関係は、物体の部分と全体のような、全体の存在が部分の存在を含意する関係とは異なる。品価的なものが存在することは、それを基づけている対象が存在することを要求しない。言い換えれば、非存在対象に基づけられた品価的なものが存在することが許容される (cf. Findlay 1963, p. 320)。

このような、対象に帰される非個人的価値は評価主体からは独立のものであり、この意味で非個人的価値は非相対的 (絶対的) な価値である。ある対象についての私たちの感情が正しいものであるかどうかは、当の対象が実際に有している非個人的価値、言い換えればその対象に基づけられた存在する品価的なものを現前化しているかどうかによって規定されることになる<sup>7</sup>。対象に実際に帰属する品価的なものは特に「品価」(Dignität) と呼ばれる (EP, p. 397)。他方で、どのような経験も対象を現前化するというマイノングの立場に基づけば、誤った感情においても何らかの品価的

---

6. 一方で、次の点についてはマイノングの議論には解釈の余地があるように思われる。つまり、価値はあくまで基づけるものを必要とするということなのか (必要条件なのか)、それとも、価値はそれを基づけているものによって完全に決定される (十分条件なのか) ということなのかである。

7. 非個人的価値は非時空間的な存在者であり、時空間的な存在者が「実在する」(existieren) と言われるのに対して、非時空間的な存在者は「存立する」(bestehen) と言われる。

なものが対象として現前化されていることになる。私の知る限りマイノングはそのようなケースについて明確な説明を述べているわけではないが、基本的には次のように考えることができる。つまり、品価的なものには存在（存立）するものと非存在のものがあり、正しい価値感情の対象が存在する品価的なものであるのに対して、誤った価値感情の対象は非存在の品価的なものである。

具体例として料理の例を再び引き合いに出せば、同じ料理がある人にとってはおいしく感じられ、別の人にはまずく感じられるということは別に、料理にはその非個人的価値として、その出来栄えに応じた価値があると考えられることができる。例えば、一流の素材を用いて適切な手順や調理法によって作られた料理と、反対に粗悪な素材を用いて不適切な手順や調理法によって作られた料理を比較することを考えてみよう。二つの料理に関する非個人的価値の、ひとつの、そしてもっともらしい可能性は、前者は味に関して客観的に肯定的な価値（快さ）を、後者は客観的に否定的な価値（不快さ）を基づけ、このことは評価主体の評価傾向とは独立である、ということである。どんなに「優れた」料理であっても、人の評価傾向（味の好み）によっては否定的な価値を持つように感じられることは当然ありうるが、それは上記の意味での料理の客観的な価値とは無関係である。

それにも関わらず、非個人的価値と個人的価値の間には一般に相関関係がある（PPW, p. 281）。料理の例で言えば、肯定的な非個人的価値を持つ料理は多くの人にとって肯定的な個人的価値を持つ傾向にあるが、否定的な個人的価値を持つ料理はその反対である、と考えることは、実際それほど奇妙ではないだろう。このような点で非個人的価値は個人的価値と関係していると考えられる。

まとめれば、マイノングは価値を個人的価値と非個人的価値に分け、どちらについても実在論の立場を採りつつ、前者に関しては主観主義かつ相対主義を、後者に関しては客観主義かつ強い絶対主義を採る。一方で、非個人的価値は個人的価値に影響するという点で、両者はまったく独立のものではない。マイノングはどちらの価値概念も私たちにとって重要な、探究の意義のあるものであることを強調しているが（EP, p. 443; cf. PPW, pp. 281ff.）、二つの価値概念は対等というわけではなく、あくまで非個人的価値が真正の、本来の意味での価値とみなされる。

したがってマイノングの見解による価値経験の構図は、対象の個人的価値によって感情が喚起され、感情を通じて対象の非個人的価値が現前化される、という形に要約することができる。マイノングの価値論の発展は、主観主義的な前期価値論から客観主義的な後期価値論への転換としてしばしば整理される。このことは誤りではないものの、後期価値論は主観主義的な価値概念（個人的価値）と客観主義的な価値概

念（非個人的価値）の二つの価値概念を含むものであり、このうち前者の個人的価値の基本的な特徴づけが前期価値論を継承している。この点でマイノングの価値論の発展はむしろ、主観主義的な価値概念に客観主義的な価値概念が加わった上で、客観主義的な価値を基盤として全体的な理論が再構築されていったという描像のもとで理解されることが適切であると言える。

#### 4. フッサール価値論との比較

志向性理論や形而上学といった領域においてマイノングの見解がしばしばフッサールの見解と比較されるのと同様に、価値論の領域においても両者は共通性と差異の両面で興味深い関係にある。まず共通性について言えば、価値と感情の関係に関するフッサールの立場について、八重樫 (2017) はそれが価値は感情によって把握されるという立場（把握説）であるという解釈を擁護している（八重樫 2017, §4.4）<sup>8</sup>。価値の把握説の代表的見解のひとつがマイノングの価値論に他ならないことを踏まえれば、マイノングとフッサールの価値論は少なくともこの基本的な点で共通点を持つと言える。では、マイノングの価値論はフッサールの価値論に対してどのような点で異なり、どのような点にそれぞれの特徴があるのだろうか？ 以下では、フッサールの価値論に関する八重樫 (2017) の議論を手がかりとしてこの点を検討することにしたい。

はじめに、フッサールの価値論の基本的な立場を確認しておこう。八重樫が述べるように、『論理学研究』の時点におけるフッサールは、評価作用は非客観化作用であるという立場、つまり評価作用に（それを基づけている知覚や判断などの作用の対象とは別の）固有の対象を実質的に認めない立場を取っていた（八重樫 2017, pp. 34, 45f.）。しかしながらその後フッサールは、『イデーニ I』にも見られるような、評価作用の固有の対象としての価値を認める立場に移行する（八重樫 2017, p. 34）。価値の把握説に基づいて解釈すれば、そのような、価値を対象とする評価作用が感情である。

八重樫は移行後のフッサールの立場を、超越論的観念論に基づいて客観的かつ構成されるものとして価値という対象を認める立場として特徴づけている（八重樫 2017, pp. 139f.）。ここで価値が「客観的である」ということによって意味されている

---

8. 同様の解釈として、例えば Mulligan (2010, p. 483)。



のは、価値に関する見解には正誤があること、そして価値は評価主体の評価傾向や実際に下される評価から独立であるということである（八重樫 2017, p. 143）。（さらに、価値が心的な要素に属するものではなく対象の側の性質であるということもこれらに付け加えることができるだろう。）また、価値が「構成されるもの」であるということは、それがいかにして構成されるのかを明らかにすること（構成分析）が価値論の実質であることを意味する（八重樫 2017, pp. 144f.）。八重樫によれば、そのような構成分析の遂行は、価値を本来的に与える作用（のタイプ）である感情に関して、ある感情が正当と言えるような条件（正当性条件）を明らかにすることに他ならないが、そのような条件は評価主体や価値を持つ対象が置かれている文脈に対して依存的である（八重樫 2017, pp. 171ff.）。したがって、「感情の正当性条件は、[...]「対象がしかじかの非価値的性質をもち、対象と主体がしかじかの感情の文脈に置かれているならば、主体はその対象に対して、しかじかの尺度においては、しかじかの感情を持つべきである」といった形式をとることになる」（八重樫 2017, p. 176）と言われる。価値はこのような意味で相対的なものである<sup>9</sup>。

このような仕方では、フッサールの価値概念は客観主義的かつ相対的なものとして解釈することができる。他方で、前節までの議論に基づけば、個人的価値と非個人的価値というマイノングの二種類の価値的な概念のうち、本来的な価値概念としての非個人的価値は客観主義的かつ絶対的（非相対的）なものである。したがって、両者の価値概念は客観的なものであるという点では共通しているが、フッサールの価値概念が相対的なものである一方、マイノングの価値概念は絶対的なものであるという点で異なることになる。

ただし、（本来的な意味での価値である）非個人的価値が評価主体に相対的なものではないということによって、マイノングは価値が相対性に関わるということ进行全面的に否定しているわけではない。3節で述べたように、前期価値論から後期価値論への転換を経て、マイノングの後期価値論では非個人的価値が本来的な意味での価値概念として位置づけられるようになる一方、前期価値論の主観主義的かつ相対的な価値概念は放棄されたわけではなく、個人的価値という位置づけで継承されてい

---

9. ただし、八重樫（2019）において八重樫は、道徳的価値は他の価値と異なり絶対性を持つとしている（cf. 八重樫 2019, p. 311）。しかしながら、少なくとも八重樫（2017）で論じられている限りでは、絶対性が問題になっているのは道徳的価値一般ではなく、道徳的価値の中でも行為に関する事柄（絶対的当為）であるように思われる。また、もし道徳的価値だけが絶対性を持つのであれば、その例外性が価値全般の相対性の説明とどのように両立するのかということも問題になる。

る。2節で議論したように、個人的価値の相対性は感情の対象としての価値の相対性ではなく、それによって喚起される感情に関する相対性である。

私の考えでは、価値の相対性に関するこのようなマイノング流の説明戦略は決してナンセンスなものでない。このことは、知覚的性質の相対性との類比によって擁護することもできるだろう。経験の主体や観点などによって同じものが異なる色に見えることがあるように、評価主体や観点などによって同じものが異なる感情を喚起することは可能である。しかしながら色の場合、同じものが異なる色に見えるということから、それが複数の色を同時に持つということが直ちに帰結するわけではない。あくまでそれは一意的な色を持つのであり、その色を把握する知覚だけが真正な知覚である、と考えることは十分可能である。価値に関しても同様に、対象に実際に帰属される、存在する非個人的価値はあくまで一意であり、その非個人的価値をまさに現前化する感情だけが正しい感情である、と考えることができる。

以上の補足を踏まえて、あらためてフッサールのマイノングの価値論における価値の相対性の問題に注目しよう。マイノングの価値論は、感情の相関者としての非個人的価値に相対性を認めるわけではなく、したがってそれを対象とする感情の正当性も相対的なものではない。しかしながら対象は同時に、異なる肯定的な感情や否定的な感情を評価主体に応じた仕方でも喚起しうるものであり、対象はこの意味での価値（非個人的価値）の相対性を有している。これに対してフッサールの価値論においては、あくまで感情の正当性自体に一定の相対性が認められており、感情の相関者としての価値そのものにもそれに応じた形で相対性がある<sup>10</sup>。このとき問題になるのは次のことである。マイノング流の価値論においては、感情の客観的な正しさの可能性は非個人的価値の絶対性によって担保することができる。では、フッサールの価値論において、価値自体の相対性を認めると同時に感情の正当性を担保するということがいかにして可能なのだろうか？

この点に関して八重樫は、フッサールの構成概念を超越論的観念論の枠組みの中に位置づけることによって価値の客観主義と相対主義の両立を図る理路を見いだしている（八重樫 2017, pp. 74, 88ff.）。すなわち、フッサールの価値論においては価値

---

10. 少なくとも『イデーニ I』において、フッサールは単なる対象と「価値ある対象」、そして価値そのものを区別する一方で、評価作用の相関者を（価値そのものとするのではなく）「価値ある事象あるいは価値」であると述べる箇所も見られるように、フッサールは評価作用の対象を価値そのものよりも広く捉える場合がある点には注意が必要である（Hua III/1, pp. 76, 220）。ここではさしあたり、マイノングの情動的現前化の場合と同様に、評価作用としての感情の対象を価値そのものに限定する。

の構成分析によって明らかにされうるような感情の正当化条件があり、そのような正当化条件を満たす仕方では理性的に根拠づけられた感情の正しさと、その相関者としての価値の存在は超越論的観念論の議論によって保証される (cf. 八重樫 2017, pp. 91ff., 139ff., 181f.). 先に述べたマイノング流の価値の相対性の説明と対比するならば、評価主体や観点等によって同じ対象が異なる感情を喚起することが可能であるだけでなく、それらの感情が (理性的に根拠づけられた) 正しいものである限りにおいてどの感情も正しいものであり、それぞれに対応する価値がその相関者として存在すると言える。何が客観的に存在する価値であるかということは、適切な条件が満たされる限りにおいて、経験の主体との相関関係においてのみ語るができるようなものである。

まとめれば、マイノングとフッサールの価値論はともに把握説として理解可能であり、さらにどちらも価値に関する相対性を何らかの仕方では認めるものである。一方で、価値の相対性がどのようなものとして説明されるかという点で両者の理論は異なっている。特に価値と感情の関係に関して、マイノング流の価値の相対性から含意されるのはいわば感情の相対性に留まり、ある感情が正当なものであるかどうかはあくまで絶対的なものであるのに対して、フッサール流の価値の相対性には並行して感情の正当性の相対性が伴っている。そしてこの違いは、より根本的なレベルでは、フッサールの価値論が超越論的観念論に依拠するものであるのに対して、マイノングの価値論はそうではない、という観点からも捉えることができる。

## 5. 基づけられた対象としての価値と価値の相対性

このような比較を踏まえてマイノングの価値論を再検討する場合、マイノングの価値論における価値の相対性の説明は十分に説得的なものと言えるだろうか？ 前節で述べたように、私の考えでは、マイノングが個人的価値によって認めるような意味での感情に関する相対性が価値に確かに存在するという事は、それ自体としては十分に受け入れられるものである。しかしながらそれによって、フッサールの価値論をめぐって関心となっているような、感情の正当性に関わる本来の意味での価値の相対性について説明がなされるわけではない。もちろん、感情の正当性や本来の意味での価値に相対性を認めるべきか否かはそれ自体として議論の余地があるが、この意味での価値に関する相対性を擁護する直観や議論に対して、(単に非相対性を

主張する以上の) 何らかの応答は必要になるように思われる<sup>11</sup>。

この点に対するマイノング価値論の応答可能性を考える上で、私の提案は次のようなものである。3節で述べたように、マイノングは価値を基づけられた対象として位置づけているが、マイノングが非個人的価値として想定しているのは、その価値が帰属される対象のみに基づけられた価値のみであるように思われる。しかしながら私たちは、価値の基づけのいわば「範囲」を広げることで、価値が帰属される対象そのものだけでなく、評価主体や、観点や文化といった文脈にも基づけられて存立しうるような価値を考えることもできる。そのような価値は、その対象にとって外在的な要素とは一切独立な、価値が帰属される対象のみに基づけられた価値としての絶対的な価値に対して、当の対象以外のものにも基づけられているという意味で相対的な価値である<sup>12</sup>。価値概念をこのように拡大することは、絶対的な価値の可能性を確保するという客観主義的な価値論のひとつの動機を（そのような絶対的な価値が実際に存在するかどうかについては留保するとしても）満たしつつ、観点や文化に応じた価値の相対性という別の直観を認めることを可能にするひとつの理論的な選択肢である。

このような見方は、感情の正当性をその根拠づけ可能性によって与えるというフッサール価値論の戦略とも無縁ではないだろう。Mulligan (2022) においてマリガンは、1908/09年の「倫理学の根本問題」講義 (Hua XXVIII, pp. 233–345) を主に参照しつつ、価値に関する「ならば (because [weil]) 関係や価値事実の基礎づけ (grounding [Begründung]) 関係、そして価値述語と非価値述語の間の基づけ (foundation [Fundierung]) 関係についてのフッサールの見解を論じている。構成分析が本来的には作用に関する分析であるとしても、作用と対象の（あるいはノエシスとノエマの）相関関係を踏まえれば、マリガンの議論が示唆するように、それに対応する対象の側からの同様の分析も可能であるはずである。基づけられた対象としての価値の概念とその分析はこの点で、マイノングとフッサールの価値論の両者にとって意義を持つもうひとつの共通項とも言えるものである。

---

11. 例えば現代のメタ倫理学においても、この意味での（道徳的）価値が持つように思われる相対性をどのように扱うかが問題になる (cf. 佐藤 2017, 2章)。

12. 価値が帰される対象以外にも基づけられた、このような拡張された意味での非個人的価値は、個人的価値とは異なるものである。個人的価値は評価主体に感情を喚起する、対象の傾向的性質であるが、傾向的性質それ自体は通常、それが帰される対象以外のものに基づけられている必要はない。また、個人的価値は情動経験において現前化される対象そのものではなく、感情の正当性に関わるわけではないのに対して、非個人的価値は情動経験において現前化される対象であり、感情の正当性に関わる。

## 結論

マイノングの価値論は、個人的価値と非個人的価値という二つの価値概念に依拠しており、それぞれが評価主体の感情と関わる。個人的価値は評価主体に何らかの感情を喚起する、対象の傾向的な性質であり、評価主体に相対的である。他方で非個人的価値は、情動経験において現前化され把握される感情の本来的な対象であり、その価値が帰される対象に基づけられて存在（存立）する。そして、感情が正当なものであるのは、それによって存立する非個人的価値が把握される場合である。

マイノングとフッサールの価値論はともに価値が感情によって把握されるという立場（把握説）として解釈可能であるが、両者の理論の一つの違いは、価値に関して認められる相対性が、それによって喚起される感情に関する相対性なのか、それとも感情の正当性の相対性なのかという点にある。マイノングの価値論においては感情の正当性は非相対的なものであるが、基づけられた対象としての価値という概念を拡張することで、マイノングの価値論にも感情の正当性に一定の相対性を認める余地がある。基づけられた対象としての価値という概念がマイノングやフッサールの議論からどのような形で、どこまで取り出せるのかを明らかにすることは今後の課題である。

**謝辞** 原稿に対する八重樫徹氏のコメントに感謝する。本研究は JSPS 科研費 JP23KJ0826 の助成を受けたものである。

## 文献表

- Chrudzimski, Arkadiusz. 2007. *Gegenstandstheorie und Theorie der Intentionalität bei Alexius Meinong*. Springer.
- Findlay, John N. 1963. *Meinong's Theory of Objects and Values*. Oxford University Press.
- Husserl, Edmund. 1976. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie I*. In: *Husserliana III/1*. [= Hua III/1]
- . 1988. *Vorlesungen über Ethik und Wertlehre. 1908-1914*. In: *Husserliana XXVIII*. [= Hua XXVIII]
- Marek, Johann. 2024. “Alexius Meinong”. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2024). URL=< <https://plato.stanford.edu/archives/spr2024/entries/meinong/>>.

- Meinong, Alexius. 1894. *Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werttheorie*. In: *Alexius Meinong Gesamtausgabe III* (1968), 1-244.
- . 1912. “Für die Psychologie und gegen den Psychologismus in der allgemeinen Werttheorie”. In: *Alexius Meinong Gesamtausgabe III* (1968), 267-282. [= PPW]
- . 1917. *Über emotionale Präsentation*. In: *Alexius Meinong Gesamtausgabe III* (1968), 283-468. [= EP]
- . 1921. *Selbstdarstellung*. In: *Alexius Meinong Gesamtausgabe VII* (1978), 1-62.
- . 1972. *On Emotional Presentation*. Translated by Marie-L. Kalsi. Northwestern University Press.
- Mulligan, Kevin. 2010. “Emotions and Values”. In: *The Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*. Oxford University Press.
- . 2022. “Logic, Logical Norms, and (Normative) Grounding”. In: *Bolzano’s Philosophy of Grounding: Translations and Studies*. Oxford University Press.
- Reicher, Maria E. 2009. “Value Facts and Value Experiences in Early Phenomenology”. In: *Values and Ontology: Problems and Perspectives*. De Gruyter.
- Scheler, Max. 1966. *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*. In: *Max Scheler Gesammelte Werke II*.
- Simons, Peter. 2017. “Objects and Objectives, Dignitatives and Desideratives: Meinong’s Objects of Cognition and Affect”. *Axiomathes*, 27: 443-453.
- Sylvan, Richard. 1986. “The Way of Values”. In: *Three Essayes upon Deeper Environmental Ethics*. Departments of Philosophy, Austrian National University.
- Yourgrau, Palle. 1987. “The Dead”. *Journal of Philosophy*, 84: 84–101.
- 小倉 貞秀. 1972. 「価値論について」. 広島大学文学部紀要, 31(2): 1–20.
- 佐藤 岳詩. 2017. 『メタ倫理学入門』. 勁草書房.
- 八重樫 徹. 2017. 『フッサールにおける価値と実践』. 水声社.
- . 2019. 「反省と愛の倫理学：『フッサールにおける価値と実践』への批判に応える」. フッサール研究, 16: 308–328.